

平昌パラリンピックについて

平成30年3月23日
オリンピック・パラリンピック
及びラグビーワールドカップ
推進対策特別委員会

I 平昌パラリンピックについて

○ 大会の概要

- ・会 期：平成30年3月9日（金）～18日（日）【10日間】
- ・競技・種目数：6競技80種目
- ・日本選手団：38名（5競技）、関係者48名

○ 都の派遣職員数（オリンピック・パラリンピック準備局）

- ・ジャパンハウスの運営 10名
 - ・オブザーバープログラム 20名
- （上記の人数には、両方参加した職員3名を重複して計上）

II 平昌パラリンピックにおける取組

○ TOKYO 2020 JAPAN HOUSE

- ・都と組織委員会が江陵オリンピックパーク内に、開催都市東京及び東京2020大会のPRを目的として設置
- ・THE TOKYO TRAVELLERS コーナー、追加競技イメージフォトコーナー、日本文化体験コーナーなど体験型コンテンツやPR展示コーナーに加え、パラリンピック期間は、新たにボッチャ体験コーナーや東京2020大会マスコット紹介パネルなども実施
- ・平昌オリンピック、パラリンピック両大会期間中の合計で15万人を超える、観戦者や大会関係者、メディア等が来場し、国内外の多くの取材を受け、大きな注目を集めた



追加競技イメージフォトコーナー



ボッチャ体験コーナー



東京2020大会マスコット紹介パネル

（参考）東京2020ライブサイトin2018

- ・パラリンピック大会期間中、大会開催気運の盛り上げを目的として、都立日比谷公園や（仮称）花畑広場（熊本県熊本市）でライブサイトを実施
- ・大型ビジョンでの大会生中継、地域団体や大学生等によるステージプログラム、競技体験等を行い、平昌オリンピック、パラリンピック両大会期間中の合計で約15万人が来場



日比谷会場

III パラリンピック・オブザーバープログラム

○ プログラム参加の概要

- ・IPC、平昌組織委員会が大会時に実施する学習プログラム
- ・平昌大会は冬季大会であるが、会場等でのバリアフリー、アクセシブルな輸送など、東京2020大会と共通する課題に関する分野を中心に、51プログラム中42プログラムに参加し、知見を習得

○ プログラムを通じて得られた主な知見

（1）競技会場等のアクセシビリティ

- ・各会場の車いす用座席はIPCの指針を踏まえ、全座席数の約1%。同伴者席を隣に配置。安全柵により事故防止を図るとともに、前席の観客が立ち上がった際にも観覧可能なサイトラインを確保
- ・健常者用トイレに隣接して、車いすの回転スペースを確保した障害者用トイレを設置



江陵オーバル会場の車いす用座席

（2）輸送におけるアクセシビリティ

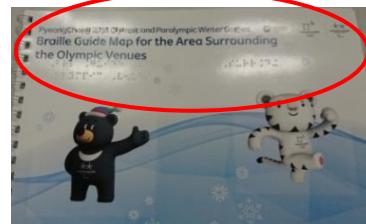
- ・オリンピック大会に引き続き、ソウル市等から賃借した低床バスを活用。パラリンピック期間中は、さらに、車いす用リフト付きバスを運用し、選手など関係者のニーズに対応
- ・KTX車両とホームの段差への対応として、駅員がリフト等で乗降を補助。会場等への主要なアクセス駅である珍富駅、江陵駅には、障害者用トイレ、視覚障害者誘導用ブロック等を整備



KTXの車いす乗降用リフト（江陵駅）

（3）情報アクセシビリティ

- ・視覚障害者向けに、点字のガイドブックや地図、一部の会場でアプリを活用した実況中継のサービスを提供
- ・聴覚障害者向けに手話通訳のスタッフを配置
- ・案内サインの設置位置については、車いす利用者にも見えるよう配慮



点字が施された地図

（4）人的サポートの提供

- ・ボランティアが車いすを押して目的の場所へ案内するなどの補助を実施
- ・視覚障害者誘導用ブロックの敷設が十分でない場所については、ボランティアによる案内で対応
- ・車いす利用者や高齢者等向けに、カートによる輸送サービスを提供



ボランティアによる車いす利用者への補助